

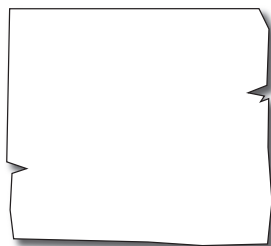
THE 7 FRAMES FOR LIFE

7つのワクワク枠

ふたりのコンパス②

第5フレーム

『For』



『Against』

木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

彼女のために 僕は何ができる？

彼女^る唄^ね音、おじいさん…と支え合う
思春期さんぽのフルーツフル青春物語

SAMPO FRUITS



ふたりのコンパス②

『Against For』

プロローグ

97

高校2年の初夏。

おじいさんに会うために岬へと出発した。

カメラを持って——

音楽イン♪ 夏 Summer

とおいで輝くキラリを——

カシャ！

——これがズーム・アウト。

近づいて、おじいさんの笑顔——

カシャ！

——これがズーム・イン。

「アッハッハッ！ なんだか照れるのお。カメラは——」

それから僕は、あの恥ずかしい悲劇のことも含めて、おじいさんにあれこれ話して聞かせた。

「アハーッ、アハーッ、アッハッハッハッハッ！！ ——傑作じゃ！
アッハッハッハッ！！」 その“悲劇”を聞いたおじいさんは、涙
をこぼしながら腹を抱えて笑った。

——こんなに笑うおじいさんを初めて見た。

「ある意味、ラッキーじゃったの？」

「ったく—— ふざけないでくれよ。

笑いごとじゃなくて致命傷だよ。イメージ最悪だし——」

「ん？ すまん、すまん。

じゃが、若者よ—— そういうもんじゃ。人生はカッコいいこと
ばかりじゃない。そういう、どうしようもなくカッコ悪いことも
ありつつ人生は成り立っておる。

——心配いらん。

笑い飛ばせるときが、いつかきつと来るはずじゃ」

「——」 . . .

「わしなんか、もう、カッコ悪くて恥ずかしいことだらけじゃ。

それでも、これまで生きた。それでも、今、生きておる。

それでも、これからも生きるじゃろう。

人生は、いとおしいもんじゃて」

「——」

しばらく遠くを眺めていたおじいさんが、ポツリと口を開いた。

「彼女のこと、今も好きじゃろうか？」

. . . 「——ああ」

「うむ、そうか。

では、さっそく第5フレームを紹介しよう。きっと役立つはずじゃ」

「そうは言っても—— どうあがいても、かなわぬ恋だよ」

「まあ、その恋がかなうかどうかは、“ふたりの相性”の問題があるから、わしもようわからん。

じゃがのお—— これだけは、はっきり言える。

人生における“大きな大きな財産”をもたらししてくれるじゃろう。

きつと」

「人生における“大きな大きな財産”——」

「そうじゃとも」

・・・「よくわからないけど——」 とりあえず、おじいさんに地図を手渡した。

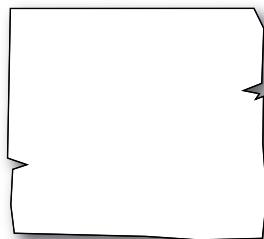
「——うむ。では、行くぞ？」

「ああ、来い来い」

音楽——テーマ曲イン
♪美しき自然 Beautiful Nature
タイトル流れて。

第5フレーム

『For』



『Against』

「『Against For』じゃ」 そう言いながら、おじ
いさんは紙の下側と上側を順番に指さした。

「『Against』と『For』—— 英語で習ったよ。『Against』

『For』は、フレーム・フォー・ライフの“フォー”でもあるよね？」

「ああ、その通りじゃな。—— うむ、ところで—— 高校生活
の方はどうじゃ？ 将来どうなりたいのか、どうしたいのか… はっ
きり見えてきたかい？」

「いいや、見えてこない。そのせいもあって勉強の方もさっぱりさ。
やる気も湧かないし、中学のときよりグッと難しくなっているし…

——まあ、とにかくいろいろベストは尽くしてみるよ」

「——うむ。そうじゃな。ベストを尽くしてみなさい。

ときには全力でやってみて初めて見える何かもあるじゃろうし、
若いからこそ成し遂げられる頑張りもあるじゃろう。

もちろん、健康にも十分気をつけながらのお」

「ああ、そうだね。ありがとう」

それから——

初夏の岬の美しい風景——

岬から望む、丸みを帯びた水平線——

おじいさんの、あたたかな眼差し——

...

を写真におさめてから、家路へ向かった。

99

自分の^{じぶん}部屋の^{へや}椅子^{いす}の背^せもたれに^{たいじゅう}体重^{たいじゅう}をかけながら、窓^{まど}の外^{そと}を眺^{なが}めていた。

Against は、“～に逆^{さか}らって、～に反^{はん}して”という意味で、

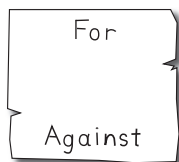
For は、“～のため^{い み}に”という意味だ。

念^{ねん}のため、英和辞典^{えい わ じ てん}を引^ひいてみた。すると、『Against For』のペアには、“反^{はんたい}対^{さんせい} 賛^{い み}成^み”の意味もあるとわかった。

——ふーん。

それから、例^{れい}によって、それ^かを書^こき込^こんだ。

「『Against』と——『For』。——こんな感^{かん}じ？」



さっそく、それ^てを手に持^もって話^{はな}しかけてみた。「こんにちは」

「キャー！ えっちい！」 コンパリーチェの第一^{だいいっせい}声。

「ええ！？」

「——あっ！ ゴメンなさい！

——キャハハ♪ お久^{ひさ}しぶりでーす♪ こんにちは」

「こ、こんにちは。あれ、大^{だいじょうぶ}丈夫^ぶ？ あれ、なんなら出^で直^{なお}そうか？」

「いいえ、大^{だいじょうぶ}丈夫^ぶよ。——それより、何^{なに}か話^{はな}があつたんじゃない？」

「あ、あれ、やっぱり『Against For』の意^い味^みってさあ——」

「つまんなーい！ せつかく、久^{ひさびさ}々^さなのに——」

「って言っても——」

「あなたが好きな女の子、どんな子が教えて、教えて♪」

「は？—— 何だ？ いきなり——。

それより、今の僕は—— 将来の、はっきりとした目標を見つけたくて—— 見つけたくて—— 見つけたくて—— …」

あんなことがあっても、いつも変わらず、あいさつし続けてくれる優しさ——

女の子らしい何気ないしぐさ——

ふと、こぼれる笑み——

...

「うーん、カワイイ子ね？」

「あわっ！？ 見るな！」

「キャハ！ しっかり見ちゃったもーん♪ 青春ね？ キャハ♡」

「——。 この子は、ただ——」

「ただ好きなのね。キャハハ♡♪ 赤くなっているし——

カワイイ♡」

「——」 . . .

「私も、好きなコンパスいるんだあ。

——キャハ♡ 人たちの間では、“好きな人がある”とかって言うんでしょ？」

「——。 まあ——」

「わたし、その彼のことが、とっても大好きなの。彼のためにできることなら、何でもしてあげたいな♪ ——キャハ♡ “すぐにも結婚できたらいいな♪” と思っているわ」

「——。——で、できるといいね」

「キャハハ！ ありがとー♪

——ああ、ワクワクしちゃうよ〜♪」

ペーパー・コンパスたちは、みんな結婚願望が強いのだろうか？

100

“ひるねちゃんが年上の彼氏と付き合っているらしい——”

そんな衝撃的なウワサが流れ出したのは、梅雨明け待ち遠しい季節の頃だった。

——ショックだった。信じられなかった。

可憐で、はにかみ屋で、優しい、あの彼女が——・・・

きっと何かの間違いだ——。

そう思った。

でも——

それ以上にショックなのは、クラスメートのほとんどが、彼女に話しかけなくなったり、彼女を避けるようになったり、彼女に対して露骨に冷たい態度を取るようになったりしたことで——

一番のショックは、彼女の顔からいつもの笑みが消えたこと。

——心がズキズキ痛んだ。

ほんとうか、のうせい、ほう、たか
本当でない可能性の方が高いのではないか？

あれほど優しい彼女が、こんなにひどい目にあうなんて、よほど、

おかしなことが起きているのではないか？

——そう考えた。

ぼく かのじょ まも
僕が、彼女を守る。

——そう決めた。

ウワサの真偽が確定していない以上——

まずは彼女の身の潔白を僕は信じる。

まんいち ほんとう
万一、たとえウワサが本当だったとしても

だれ なん い
誰が何と言っている

ぼく かのじょ ぜったい うら ぎ
僕は彼女を絶対に裏切らない。

——そう心に誓った。

それが僕の責任であり、義務だ。

——そう感じた。

「年上の彼氏？」 通学路で会ったニュートン君は目を丸くして聞き返した。僕がうなずくと、彼は、はっきり、こう言った。

「それは、きっと何かの間違いだと思うよ。彼女は、そんな子じゃないよ。よく確かめた方がいいよ」

「君もそう思うだろう？ 僕も、そう思うんだ。」

それに僕は彼女に助けられたから、ウワサが本当であろうとなかろうと関係なく、お節介かもしれないけれど、僕が彼女を守ってあげなければならないとも思うんだ」

「うん。きっと、それがいいよ」 力強く支持してくれた心笑君。

そのような親友との会話が、どれほど励みになったことか——。

101

その日の1校時には、英語の試験が待っていた。

その試験の結果は、英語の成績に直結し、大学進学にも影響する
という話だった。

その日の朝は、少し余裕を持って早めに家を出た。

例の長い上り坂を、いつも通り腰を浮かせながらペダルをこいで
過ぎた。

その後しばらく平坦な道を進んでいると、

——え？

そこには、なぜか自転車を引きながら、とぼとぼ歩いている彼女
がいた。

——なぜ？

不思議に思いつつも、こちらから、いつものようにあいさつした。

そうして、いつものように、そのまま通り過ぎようとした、まさに
そのとき——彼女の自転車の後輪の“つぶれ”に気づいた。

思わずブレーキを強く握って自転車を急停止させた。

その場で振り返ると、何も考えずに声をかけた。

「パンクしたんだ——」

「——。——ついてないね」彼女の声は、はっきり暗かったけれど、
かすかに、ほほ笑んでいるようにも見えた。

「え？ でも、その調子じゃ、間に合わない？」

英語の試験」と僕。

「——。ええ、いいのよ。——しょうがないわ」

「って——」

「私は大丈夫よ。——先^{さき}に行^いって？ あなたが遅^{おそ}れてしまうから。

わざわざ止^とまってくれて、どうもありがとう」 健^{けな}気^げに無^む理^りして明^{あか}るく、そう言^いったようにも思^{おも}われた。

「——」 彼^{かのじょ}女^よのために僕^{ぼく}は何^{なに}ができる？

あたまなか 頭^{かいてん}の中^{ちゅう}をフル回^わ転^{てん}させた。

102

「——ちつとも、しょうがないよ」と僕^{ぼく}。

「え？」と彼^{かのじょ}女^よ。

「途中^{とちゅう}に自^じ転^{てん}車^{しゃ}屋^やさん、あるじゃん。——そこまで君^{きみ}を乗^のせていくから」

「え？ でも—— え？ 私^{わたし}の自^じ転^{てん}車^{しゃ}は？」

「僕^{ぼく}が片^{かた}手^てで引^ひいていくよ」

「え？ でも——」

「僕は^{ぼく}大丈夫^{だいじょうぶ}。——あ、もし君^{きみ}がイヤなら、あれだけど」

「ううん。そうじゃないわ」 首^{くび}をふって否^ひ定^{てい}する彼^{かのじょ}女^よ。

けつきよく ぼく じてんしゃ うし に だい かのじょ すわ
結^{けつ}局^{きよく}、僕^{ぼく}の自^じ転^{てん}車^{しゃ}の後^{うし}ろの荷^に台^{だい}に彼^{かのじょ}女^よは座^{すわ}った。

それから、彼^{かのじょ}女^よの自^じ転^{てん}車^{しゃ}のハ^{かた}ン^てド^てルも片^{かた}手^てでグ^ぐイとつかむと、
ペ^ちダ^こルに力^{はじ}を込^こめた。始^{はじ}めはグ^ぐラグ^ぐラしていたけれど、だんだんと

ゆ　ちい
揺れは小さくなった。

さいわ　さき　へいたん　みち
幸い、そこから先は、ずっと平坦な道のりだった。

でも、しばらくすると――

「やっぱり、少し危ないわ」　かのじょ　い　に　だい　お
彼女は、そう言いながら荷台を降り
ると、そのまま僕　ぼく　じてんしゃ　お　はし　つづ
の自転車を押して走り続けてくれた。

103

だいじょう　ぶ　はし　たず　かのじょ
「大丈夫？　ハア、ハア…」　走りながら尋ねる彼女。

「ああ、大丈夫、大丈夫。12分の1だし――　っていうか、そっち
だいじょう　ぶ
こそ大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。ハア、ハア…　――12分の1？　ハア、ハア、ハア
かのじょ　ぼく　いき　なか　き　かえ
…」　彼女が僕に、はずむ息の中でそう聞き返した。

「そうなんだよ。自転車だと、同じ距離を歩くのに比べて、およそ
ぶん　ろうりよく　す
12分の1の労力で済むんだって。

ちゅうがく　ぎ　じゅつ　か　てい　なら
たしか、中学の技術家庭で習ったよ」

「――ハア、ハア…」

「あつ、今は、2台分だから、6分の1？　――あつ、でも、今は
いま　だいぶん　ぶん　いま
お　押しもらっているから、――9分の1くらい？　アレ？」

「――ハア、ハア…」

「っていうか、君　きみ　ほう　いま　ばい
の方は、今、3倍くらいになっちゃっている？
アレ？」

「——ンフフッ」^{かのじょ} 彼女は、^{わら}笑ったらしかった。

どうにかこうにか^ぶ無事に^{じてんしゃや}自転車屋さんにたどり着くと、すぐにパンクを^{なお}直してもらうことができた。

そうして、ふたりとも、^{なん}何とか1校時の^{こうじ}英語の^{えいご}試験の^{しけん}開始時刻に^{かいし}間に^あ合ったんだ。

104

^ひ その日の^{ゆうがた}夕方^{かえ}の^{みち}帰り道——

まさに、そこから^{くだ}下り坂^{ざか}に入るとい^{はい}うポジションに、^{かのじょ}彼女が^た立っていた。^{じてんしゃ}自転車を^{ささえ}支えながら——。

^め 目と^め目が^あ合った。

「おう」^{ぼく} 僕は、^{かる}軽く^{えしゃく}会釈しながら^{ちい}小さく^て手を^ふ振った。

^め 目と^め目が^あ合い^{つづ}続けながらも、いつもどおり、そのまま^{げんそく}減速せずに、^{あいさつ}あいさつをして^{とお}通り^す過ぎようとする、まさにその^{しゅんかん}瞬間、^{かのじょ}彼女が^{くち}口を^{ひら}開いた。「あ、^ま待って」

^{いひよう} 意表を^つ突かれた^{ぼく}僕は、あわててブレーキをかけた。

^{おも} 思わず、きょんとしながら^ふ振り返った。

^{かのじょ} 彼女は^{すう}数メートル^か駆け^か寄った。

それから、おずおずと^{はな}話し^{はじ}始めた。

「あ、あの——^け 今朝は、^{ほんとう}本当に、ありがとう。

あれ、^{がっこう}学校では、^{なん}何だか^{はな}話しづらくて—— それで、その、もう

いちど 一度、きちんと、お礼^{れい}が言^いいたくて——。 ——。

わたし 私、今朝^{けさ}ちょっと投^なげやりになっちゃっていたの——。

だから、私^{わたし}、その、——本^{ほん}当^{とう}に助^{たす}かったの。

ほんとう 本^{ほん}当^{とう}に助^{たす}かって、ありがたくて——。 ——。

だから、私^{わたし}——。 ——。 私^{わたし}——」

とちゅう 途中^{ちゅうちゅう}まで一^{いっ}緒^{しょ}に帰^{かえ}ろっか？」

「——ウン♪」 彼女^{かのじょ}の顔^{かお}に笑^えみがこぼれた。

それから彼女^{かのじょ}は、自^じ分^{ぶん}の自^じ転^{てん}車^{しゃ}のサドルの^{うへ}上^{こし}に腰^おを下^{くだ}ろすと、口^{くち}を^{ひら}開^{ひら}いた。「私^{わたし}、この“帰^{かえ}りの下^{くだ}り坂^{ざか}”、大^{だい}好^すき」

「——え？ どうして？」

「だって—— 風^{かぜ}が気^き持^もちいいんだもん。 ——それにラクだし♪

フフツ」

「アハハッ。そうだね」

ぼく 僕^{おな}も同^{かん}じように感^{かん}じていた。

ゆうぐ 夕^な暮^かれの中^{なか}、2台^{だい}の自^じ転^{てん}車^{しゃ}が、ふたつ^{ふたつ}の笑^えみを運^{はこ}びながら、なめらかに坂^{さか}を下^{くだ}った。

105

帰り道の分岐点で、さよならのあいさつをする代わりに—— 思
いきって、彼女のライフの中に飛び込むことにした。あのデリケー
トなテーマについて、やんわりと質問してみることにしたのだ。

すると、意外な答えが返ってきた。

「え？ 義理のお兄さん？」と僕。

「そう。ショッピングモールで、ばったり会ったの」と彼女。

「ショッピングモール？」

「そう。あの日、私、寝坊しちゃって朝食を食べそびれていて——
しかも、学校で、何だかんだで、お昼も食べそびれちゃって——。

だから、放課後、あまりにお腹がペコペコで、このままじやまず
いと思ったから、ショッピングモールに寄って、たい焼きか何かを
食べてから家に帰ろうと決めたの——」

「——」

「それで、モールに着いたあと、目的地へ向けて少しフラフラ気味
で歩いていたら、お義兄さんとばったり会ったの。

お義兄さんも、ちょうど遅い昼休みを取ろうとしていたときだっ
たから、私に御馳走してあげようって話になって——。

最初断ったのよ。でも、つつい甘えてしまって——」

「ごちそう——」

「御馳走って、ファミレスで—— はじめは慎重しく、おソバを注
文して食べていただけよ。でも、私が、おソバを思わず勢いよく食
べてしまったものだから、それを見て、きつと不憫に思ったのね。
お義兄さんが、知らないうちにデザートも追加注文してくれて——」

「デザート？」

「そう。アイス・オン・フルーツ・イン・ヨーグルト。

——ヨーグルト和えフルーツの上に、フローズン・ヨーグルトのアイスがのっているだけのデザートなんだけどね」

「——」 . . .

「私と、姉やお義兄さんは10歳以上も年が離れていて、私が小さい頃、お義兄さんも交えて家族みんなでファミレスに行ったことがあって—— そのときに、アイス・オン・フルーツ・イン・ヨーグルトを私が喜んで食べていたのを、もしかしたら覚えていてくれたのかもしれないけど——。 ——」

「——」

「私は、おソバをいただいたし、もうこれ以上食べられないって、はっきり断ったのよ。

でも——、——。店員さんが早々と作って持ってきてちゃうし—— お義兄さんは、早々と会計を済ませて仕事に戻っちゃうし—— 上にのっているアイスが溶け始めちゃうし——。 ——。

それで、何だかんだで—— ペロリと全部食べちゃった。アハハッ」 恥じらいながらも満面の笑みを浮かべる彼女——。

「——」 . . .

「アレ？ 私、何の話、していたんだっけ？」

——あっ、そうそう。それで、そのときの様子を、同じクラスの誰かか、関係する誰かが見ていて勘違いしたんだと思うわ。

だって、その翌日から急にクラスのみんなの態度が変わったんですもの。ほかに心当たりないし、それ以外考えられない——。

変なウワサの内容を知ったとき、私、腰が抜けそうになるほど、
 びっくりしただけでなく、その誤解が原因でクラスのみんなの態度
 が変わったんだと確信して、ホッとして涙が出ちゃった」
 「——そうだったんだ」・・・よかった——・・・

106

「そのことをしっかり説明すれば、誤解が解けて、クラスのみんな
 もわかってくれるはずだよ」

「——ありがとう。そう言ってくれて——。

でも——それでも、やっぱり、このままでいいのよ」

「え？ どうして？」

——このままじゃ、つらくない？」

「ちょっとね。——でも、大丈夫よ。——。

誤解されるようなことをしてしまった私にも悪いところがあったと
 思うし——それに、クラスのみんな、それぞれ受験勉強とかで
 ストレスたまっちゃって、自分のことで精一杯になっているのよ。

——みんなも、つらいのよ」

「そんな——」

「かりに、このウワサが否定されたとしても、今度はウワサを言い
 出した人の立場が、きっと、おかしくなっちゃうでしょ？」

「——」

「それに、この場合、みんな、大して悪気があったわけじゃくて、ただ、なんとなく——ただ、なんとなく、そういう態度をとってしまっただけのことなんだと思う」

「——」

「いいのよ。このままで。そういったイヤな連鎖は、だれかが、どこかで、きっちり断ち切らないと——」

「——」

「それに——ウワサを鵜呑みにせず、真実を知ろうとしてくれたあなたがいる。——本当に、ありがとう」

「——。 そんな——」・・・「——それより、礼を言うべきなのは、こっちの方だよ」

「——え？ どうして？」彼女が聞き返した。

「だって——プールの更衣室で倒れてしまったときのこと、急いで先生方に知らせてくれたのは君だったって聞いたから——」

だから、どうもありがとう」

「うん」はにかむ彼女。「それより、大丈夫だった？」

「ああ、おかげ様で——」

「よかった」

「——」・・・「——軽蔑した？」

「え？ 軽蔑も何も——」

——先生から話を聞いたわ。考えごとをしていて間違えて入っちゃったんだって——。許してあげてねって、先生言ってた——」

「——」

「——それに、冗談でも言っていたわ。かりに、男の子だから、好

きしん はい 奇心から入ってしまったとしても、ゆる 許してあげてねって」

「ぜえったい、わざとじゃないよ！！ ぜったい 絶対に！！」

「フフフツ。わかっているわ。だいじょうぶ 大丈夫よ」

「——」

「男の子に好奇心があったとしても—— わざと どうどう じょし こうい 堂々と女子更衣 室に入るなんて、そんな割に合わないこと、ふつう だれ 誰にもできないわ」

107

「なつみさきくん すうがく り か とく い 夏岬君は、数学や理科が得意だから、きつと り けい 理系よね。」

「やっぱり、その方面の大学とか、学部とかに進むんだ——」

かのじょ あか ちょうし わ だい か 彼女は、明るい調子で話題を変えた。

「どうなんだか——。まだよくわからないよ。そもそも、なん のため に大学に行くのか、はっきりした目標さえ、まだ見つかっていないし。はや み 早く見つけたいんだけどね」と ぼく 僕。

「——見つかるといいね。うん、きつと見つかるわよ」

「ありがとう。」

——あれ、うい か ひ 初果陽さんは、ぶんけい 文系だよね。

「やっぱり、その方面の大学とか、学部とかに行くんだ——」

「いきたい わたし しょうがっこう せんせい に行きたいの。小学生の頃、とって も、お世話になった大好きな先生がいてね、おかげで、とても せいちょう 成長 できたし、充実した楽しい小学生時代を過ごせたわ。それで、“私

も、先生のように子どもたちに喜びや楽しみや希望を与えられたら、うれしいだろうな”って思うようになって——。

——私の、あこがれね」

「へえー、いいなあ。はっきりした将来の目標があつて——」

一瞬、彼女がイキイキとした表情で小さな子どもたちに話しかけている姿が、心に浮かんだ。「——うん。きっと実現するよ」

「ありがとう。」

——お互い、頑張ろうね」

「ああ、頑張ろう」

それから彼女と僕は—— あいさつを交わし、それぞれの家路へ向けてペダルをこいだ。

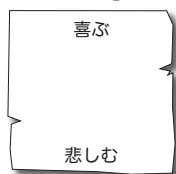
それは、ほどよく熟し始めたみかんのように甘酸っぱい、おいしい体験だった。

この恋がかなうかどうかなんてことは、すっかり頭から消えていた。その日の出来事、その日の会話を通じて—— 目に見えないけれど、とてつもなく貴重な何かをプレゼントされた気がした。

——これが、人生における“大きな大きな財産”ってやつ？

108

『For』



『Against』

その日の晩のこと——

「ステキ♡♪」 コンパリーチェは、僕らのことを自分自身のことのように喜んでくれた。

そう。コンパリーチェのアップグレードが

第5フレーム『Against For』と関連しているのは、明白だった。

ほかにも、次々と、新しいプチ・マップを作ることができた。

『Against』

クライ
わる
悪い
(悪い状況だ、体調が悪い、気持ち悪い
カッコ悪い、悪い方に考える、悪く言う…)
害になる、～のせいだ
ひどいことするなあ、ひどい
逆風だ
反対する
邪魔する、足を引っばる…
恥ずかしい、恥
卑怯だ、嘆かわしい、残念
クヨクヨ、ビクビク
悲観的
悲しい、つらい、不幸だ
つまらない
こうなるのはイヤだ、反面教師だ…
ハザード・マップだ
攻撃する、恨む
憎む

好き
よい・いい
(よい状況だ、体調がよい、気持ちよい
カッコいい、よい方に考える、よく言う…)
ためになる、～のおかげだ
ありがとう、ありがたい、すてきだ
追い風だ
賛成する、支持する
励ます、応援する…
誇らしい、誇り
立派だ、すばらしい、見事
ワクワク、ウキウキ
楽観的
楽しい、うれしい、幸せだ
おもしろい
あこがれだ、理想だ、目標だ…
宝の地図だ
守る、ゆるす
愛する

『For』

109

自分の将来を方向づけるような大切な出会い—— それは、その
 年の夏休みにあった。

音楽イン ♪ The Dream Coming True

それは、夏休みの課題図書『旅人』との出会いだった。

正確には、単に本に出会ったのではない。その著者である湯川秀
 樹に出会ったのだ。

いや、さらに正確に言うならば、湯川秀樹に単に出会ったのでは
 ない。“再会”したのだ。

小さい頃、祖母が買ってくれた湯川秀樹の子供向け伝記本を読ん
 でいたからだ。

今回の本『旅人』は、彼自身が紡いだ言葉—— 自伝だった。

『Out』



『In』

湯川秀樹——

彼は新しく生み出した成果について高く評価され、ノーベル賞を
 受賞していた。

彼は、朝も、昼も、夜も… 考えて、考えて、考えて… 考えに考
 え尽くして—— そうして、ある日、ついに、あるアイデアがひら
 めいたことがきっかけとなり、新成果にたどり着いたのだった。

その感動、迫力、興奮が… 彼自身の言葉によってダイレクトに

こころ ひび
心に響いた。

かれ じんせい ぼく ひ
彼の人生に僕は惹かれた。

あしもと およ い だい かん い けい ねん い だ い っ ぽ う
足下にも及ばない偉大さを感じ、畏敬の念を抱く一方で、どこか
じ ぶん に かん あい ち や く かん も
自分に似たところがあるようにも感じ、愛着感を持った。

それから ま かね の ぞ
それから間もなく—— 彼のように、思う存分生きてみたい。

つよ の ぞ
そう強く望むようになった。

がくもん とく ぶつ り がく こころ ざ しん ち ゅ う くん こ こ え くん き
学問、特に物理学を志していた親友ニュートン君——心笑君の気
もちが、よくわかったような気がした。

それでも、たとえ湯川秀樹のような人生にあこがれていても、難
かい すうしき やま ま ぶつ り がく こう けん ぼく
解な数式の山が待っているらしい物理学に貢献することは、僕には
ぜったい む り ち ょ う かん ち ゅ う
絶対無理だという直感は、どうにも揺らがなかった。

そこで、僕は、ライフサイエンス分野の学問を志そうと決めた。

もしかしたら、ライフサイエンス分野の学問なら、自分にも貢献
できるかもしれない。それに、フレーム・フォー・ライフとも接点
がありそうだし——。そうだ、ライフサイエンスだ！

り がく ぶ せい ぶ つ が つ か い がく ぶ まよ とく り がく ぶ じ ょ し ゅ
理学部生物学科か医学部か迷ったれど、特に理学部では、助手の
え たい へん せい か つ き び げん じ つ
ポストを得ることさえ大変で生活が厳しくなりやすいという現実を
し ぼく い がく ぶ えら
知った僕は、医学部を選ぶことにした。

そういえば、ノーベル医学生理学賞を受賞した利根川進は医学部
し ゅ っ し ん い がく ぶ がく し ゅ と ね が わ す む い がく ぶ
出身だった。それに医学部なら、たとえ学者として身を立てられ
けい ざ い て き か そく あん し ん
なかったとしても、経済的に家族を安心させられるだろう。

い がく ぶ め ざ
そうだ。医学部を目指そう。

それは、学者として花開くとは限らない中での現実的な選択にす
がく し ゃ は な ひ ら か ざ な か げん じ つ て き せん た く
ぎなかつた。それでも、こうして僕の将来が方向づけられたんだ。

110

このようにして育^{ばぐ}まれた将来^{しょうらい}の方向^{ほうこう}づけを、夏^{なつ}休み^{やす}みが明^あけて間^まもないときに、彼女^{かのじょ}に披^ひ露^{ろう}した。

「将来^{しょうらい}、学^{がく}問^{もん}をやりたい。特^{とく}にライフサイエンス^{がくもん}の学^{がく}問^{もん}をして、人^{ひと}の役^{やく}に立^たつ、いい成^{せい}果^かを生^うんで——世^よの中^{なか}に貢^{こう}献^{けん}するんだ。

それが、はつきりしてきた将来^{しょうらい}の目^{もく}標^{ひょう}だよ。

そのために、まず医^い学^{がく}部^ぶに行^いきたい。そうして自^じ分^{ぶん}の可^か能^{のう}性^{せい}を思^{おも}いっきり試^{ため}してみたい。そうやって思^{おも}う存^{ぞん}分^{ぶん}生^いきてみたい」

「すてき。応^{おう}援^{えん}するね」 彼女^{かのじょ}は励^{はげ}ましてくれた。

「ありがと。ようし、頑^{がん}張^ぼるぞー！」 気^き合^{あい}を入^いれるしぐさをしてみせた。

「その調^{ちょう}子^し、その調^{ちょう}子^し！ ——ノーベル賞^{しょう}、もらったりしてね？」

「そうそう。ノーベル賞^{しょう}、ノーベル賞^{しょう}。アハハッ」

「フフフッ」

「ただ—— こんなふうに目^{もく}標^{ひょう}ができて意^い欲^{よく}が湧^わいているのは確^{たし}かにいいけど、“学^{がく}問^{もん}のための勉^{べん}強^{きょう}と受^{じゅ}験^{けん}勉^{べん}強^{きょう}が別^{べつ}物^{もの}であるせいか、“やる気^きだけが空^{から}回^{まわ}りしている”というか受^{じゅ}験^{けん}勉^{べん}強^{きょう}が思^{おも}うようにはかどらない”というか、うまくいかないね？」

「そうなんだ——。——。

——ねえ、本^{ほん}屋^やさんへは、よく行^いくほう？」

「ううん。あまり行^いかないな。たまにネイチャー写^{しゃ}真^{しん}やカメ^{かん}ラ関^{けい}係^{けい}の雑^{ざつ}誌^しを見^みて、気^きに入^いったら買^かう程^{てい}度^ど？」

「——あ、そう言^いえ、前^{まえ}に写^{しゃ}真^{しん}のアル^みバムを見^みせてもらったよね。すてきで感^{かん}動^{どう}しちゃった」

「アハッ！ ありがとう。——あつ、そっちだって、この前^{まえ}、詩^しを読^よませてくれたじゃん。上手^{じょうず}で感心^{かんしん}したよ」

彼女^{かのじょ}は詩^しを書^かくのが好き^すだった。彼女^{かのじょ}の詩^しは明る^{あか}さと透明感^{とうめいかん}を併^{あわ}せ持^もっていて、心地^{こち}よかった。

「フッ。ありがとう」 彼女^{かのじょ}は照れ^てながら言^いった。「それでね、本^{ほん}屋^やさん^みをよーく見^みると、本^{ほん}当^{とう}にいろーんな本^{ほん}があるのよ。雑誌^{ざっし}はもちろ^ん、文芸書^{ぶんげいしょ}、絵本^{えほん}、趣味^{しゅみ}の本^{ほん}、ビジネス書^{しよ}、人生^{じんせい}についての本^{ほん}、専門書^{せんもんしょ}… 本^{ほん}当^{とう}にいろい^ろろ。

それで、知恵^{ちえ}とか工夫^{くふう}とかが書^かかれた本^{ほん}、——ハウツー本^{ほん}？ そ^うい^った本^{ほん}も、さまざ^まあ^あつて、その中^{なか}に勉強法^{べんきょうほう}についての本^{ほん}も、け^っこ^うあるのよ。

——理系^{りけい}向^むけの受験勉強^{じゅけんべんきょう}に役立^{やくだ}つ本^{ほん}も、き^っとあるはず^よ」

「へえー」 初耳^{はつみみ}だった。

「だから、き^っと本屋^{ほんや}さん^いに行^いってみ^みるといいよ」

音楽フェード・アウト ♪ The Dream Coming True

111

つぎ 日曜日^{にちようび}、さっそ^{しよてん}く書店^いへ行^いってみた。

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

店内^{てんない}をめぐると、それら^{ほん}しき本^みのグルー^みプが^みつ^みか^みつた。

——あ^あつた！

何冊^{なんさつ}か手^てに取^とつてペー^とジを^とめく^とつてみた。

それらの本の中から、最も相性がよくて役に立ちそうな、お気に入り本を見つけ出した僕は、その本を購入した。

その本の中には、“こうしたらいいよ。こうすればきつとうまくいくよ。ぜひ、こうしてみよう。…”といった知恵や工夫、アイデアが、ぎっしりつまっていた。

さっそく、それらの言葉を、自分に合うようにアレンジしながら活用してみた。すると、そのおかげで、実際に、受験勉強がグングンはかどり始めたのだ。おもしろいように――。

そうして、夏休み明けに行われた最初の試験――成績を見ると信じられないくらいアップしていた。

本に書かれた知恵や工夫やアイデアを活用することで、こんなにも、はっきりとした効果が出るという体験――それは自分にとって初めてのことだった。

本の著者の方にはもちろん、“本屋さんに行ってみるといいよ”とアドバイスしてくれた彼女にも、感謝の気持ちを抱いた。

僕は気づいた。

やる気だけでは、うまくいかない。知恵も大事だ。

さらに、僕は目覚めた。

本を読もう。

もっと本を読もう。

読みたい本はもちろん、読むべき本が、ほかにも、まだまだあるかもしれない。

それからの日々は、僕も、書店へと、よく足を運ぶようになった。

読みたい本はないかなあ。読むべき本はないかなあ。…

そんな気持ちで店内をめぐらるために——。

当時は、わりあい、“こう生きるといいよ。こう生きればきっと
うまいくよ。ぜひこう生きてみよう。…”のような、人生における
知恵や工夫、アイデア——いわば“人生の言葉”が、たっぷり、
つまった本に心惹かれた。

その一例が、アインシュタインの言葉がまとめられた本だった。

アインシュタインの業績については相変わらずチンプンカンプン
だったけれど、いつしかアインシュタインのファンになった。のち
に、“アインシュタイン”に“1つの石”の意味があることを知って
から、おじいさんにもらった丸い石を“アインシュタイン”と呼び
始めたほどだった。

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

112

秋が深まりつつあったある休日のこと——

「大っキライ！ 最低！」 コンパリーチェの叫び。

「え？ どうしたの？」と僕。

「あー！ やっぱ好きい〜！」

「ええ！？ ——どっち？」

「あー！ やっぱキライ！ 考えるのもイヤ！」

「——例えば、どんなところが嫌いな？」

「例えば、優柔不断^{ゆうじゅうふだん}なところ。大っ^{だい}キライ！」

「——もしかしたら、その部分^{ぶぶん}は、それだけ“じっくり^{ふか}深く^{かんが}考えている”という意味で、長所^{ちようしょ}かもしれないよ」

「ううん。ちつともよくない。それに優^{やさ}しすぎるし」

「アハッ。それってさあ、冷^{つめ}たすぎるより、明^{あき}らかによくない？」

「あーつもう！ キライなものはキライなの！ リクツじゃないのよ！ プンプンプンプン！」 コンパリーチェは、それきり黙^{だま}りこくってしまった。

しかたなく、コンパリーチェを机の上に置き、しばらく、そっとしておくことにした。

113

ベッドの上に横^{うへ}になり、天井^{てんじよう}を眺^{なが}めた。

初果陽^{ういかひ} 瑠音^{るね}さん——

最初^{さいしよ}は、リクツ抜きで、ただただ“好き^すだなあ”
って感^{かん}じで、いわば感情^{かんじよう}的に惹^ひかれていたんだっ
け。そうだ。好き^すキライは、感情^{かんじよう}、つまりは『カ
ラダ』の方向^{ほうこう}で決めることが多いだろう。

『アタマ』

好きキライ

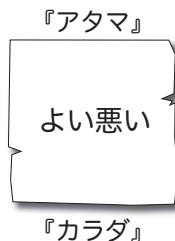
『カラダ』

それに対して、のちに、瑠音さんと知り合うことで、さらに、よ
い子^こだなと思^{おも}って、ますます惹^ひかれているのは、単^{たん}に感情^{かんじよう}的に『カ
ラダ』の方向^{ほうこう}で惹^ひかれているだけでなく、『アタマ』の方向^{ほうこう}でも惹
かれているってことなのだろう。

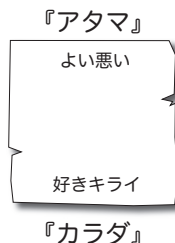
それは、好き^すキライ^{くら}に比べて、よい^{わる}悪い^{かんじょう}は、感情^{かんじょう}だけでなく、想^{そう}像^{そう}や思考^{しこう}、リクツ^{ろんり}、論理^り、理想^り、予想^{よそう}、見込み^{みこ}、見通し^{みとお}、将来^{しょうらい}…
つまりは『アタマ』の方向^{ほうこう}も関わ^{かか}って決める^きことが多い^{おお}からだろう。

よい子^こだけでなく、よい性質^{せいしつ}、よい性格^{せいかく}、よい行い^{おこな}、よい判断^{はんだん}、
よい選択^{せんたく}、よい見本^{みほん}、よい参考^{さんこう}、よい成績^{せいせき}、よい結果^{けつ}、よい環境^{かんきょう}、
よいコンディション、よい考え^{かんが}、よいアイデア… どれも『カラダ』
と『アタマ』の両方向^{りょうほうこう}が関係^{かんけい}しているだろう。

中^{なか}には、気持ち^{きもち}よい、心地^{こころ}よい… を含^{ふく}めて、
ほとんど『カラダ』の方向^{ほうこう}だけが関わ^{かか}っている
“よい”もある^すけれど、それでも、好き^すキライ^{くら}よ
り、よい悪い^{わる}が『アタマ』の方向^{ほうこう}へと意味^いが広^{ひろ}
がっているのは確^{たし}かだろう。



まとめれば—— 好き^すキライ^{くら}が『カラダ』の方向^{ほうこう}にあるとすれば、
よい悪い^{わる}は、相対^{そうたいてき}的に『アタマ』の方向^{ほうこう}にあるだろう。



うん。好き^すキライ^{くら}は、イキイキ^{やくどうかん}して躍動^も感^もを持っているし——
よい悪い^{わる}は、一貫^{いっかんてき}的で筋^{すじ}が通^{とお}りやすい。

——それぞれに、よさがあるだろう。

114

コンパリーチェを再び手^{ふたて}に取^とつてみた。

すると、開口一番^{かいこういちばん}、コンパリーチェが相談^{そうだん}を持ちか^もけた。

「ねえねえ、わたし、どうしたらいいのかなあ？」

「え？ どうしたらいいって——」・・・「それはどんな相手^{あいて}なんだい？ もう少し^{すこ}詳しく^{くわ}教えて^{おし}もらってもいい？」全く自信^{まっただじしん}がなかったけれど、とりあえず情報^{じょうほう}収集^{しゅうしゅう}にあた^あった。

「詳しく^{くわ}って言^いっても——」

「例えば、やっぱり、“でございますう〜♪”とか“ほういほういほうい〜♪”としゃべっていたり、“ギャハハ！”と笑^{わら}っていたりしているとか？」

「そうよ。——え！？ 彼^{かれ}を知^しっているの！？」

「——え！？ そういうしゃべり方^{かた}や笑^{わら}い方^{かた}って、ふつうなんじゃないの？ 君^{きみ}らの間^{あいだ}では」

「いいえ、彼^{かれ}しかいないわよ。キャハハッ♡♪」

「——ええ！？」！！！！

結局^{けっぎよく}——“コンパリーチェとコンパースの両^{りょう}想^{おも}い”が確定^{かくてい}するまで、大^{たい}して時間^{じかん}がかからなかった。

115

その後^ご、さらなる情報^{じょうほう}を得^えた。

コンパスがコンパリーチェに“結婚するですう〜♪”とかと
プロポーズしさえすれば、うまくいくらしいこと。

コンパスと僕が直接話すことは許されていないこと。

このまま放置すれば、破局をまぬがれないらしいこと。 …

はて、どうしたらいいんだろう？

ふたりのために僕ができることは、——何にもない？

うーん。 . . .

それから僕は、考えて、考えて、考え続けた。

116

そんなある日、かつてのコンパスの優しさが心に浮かんだ。

代わりに、わたくしをランプベリーとお呼びになるのでございま
すう〜♪

これが手がかりとなり、ついに、あるアイデアがひらめいた。

そのアイデアを、さっそく行動に移した。

「ランプベリーゴー♪ ランプベリーゴー♪ ——これは、ふたり
がうまくいくための、ジュモンさ」と僕。

「——ジュモン？ ランプベリーゴー♪？」聞き返すコンパリーチェ。

「そうさ。『ランプベリーゴー♪のジュモン』。 ランプベリーゴー♪
ランプベリーゴー♪…」

「ランプベリーゴー♪ 不思議な響き——。キャハハ♪ どうもあ
りがとう。ランプベリーゴー♪ ランプベリーゴー♪…」

“ランプベリーゴー♪”とは、“Lampberry, go!”という意味の、
コンパースへの“暗号^{あんごう}エール”だった。

——^{び みょう}微妙？

117

「キャハ♡♪ プロポーズされちゃったあ♪

わたしたち^{けっこん}結婚するのよ♪」

音楽イン サビの部分から ♪ Joy of Life

コンパリーチェがその朗報^{ろうほう}を^{つた}えてくれたのは、それから^{すうじつ}数日も
^た経っていないタイミングでのことだった。

「よっしゃあ！」^{じぶん}自分のことのように^{よろこ}喜んだ。

「ありがとう。『ランプベリーゴー♪のジュモン』のおかげよ♪」

「——いや、そんなことは、ないんでない？」

「——キャハ♪ そんなことがあったのよ♪ よく^{くち}口ずさんでいた
の。そしたらね、^ま間もなくよ、^{ほんとう}本当に^ま間もなく——。彼^{かれ}の方^{ほう}から
^{けっこん}“結婚するですう～♪”って。

——キャハハ♡！ うれしーい♡♪ ^{しあわ}幸せ♡♪」

「アハッ！ おめでとう。よかったね」 ——ビンゴ！

「ありがとう。」

——^{こんど}今度は、あなたの^{ばん}番だからね。

^{ゆめ}夢の実現^{じつげん}のことも、^る瑠音^ねちゃんとのことも、^{おうえん}応援^{えん}しているからね。

キャハハ♡♪」

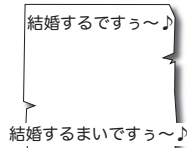
音楽フェード・アウト ♪ Joy of Life

118

そうだ。“結婚するまいですう♪”が『Against』
 の方向にあるならば—— “結婚するですう♪”
 は、『For』の方向にあるだろう。

——似た例は、ほかにも見つかった。

『For』



『Against』

『Against』

『For』

こう生きるまい、こう生きるのはイヤ	こう生きよう、こう生きたい
宝探しに行くまい、宝探しに行くのはイヤ	宝探しに行こう、宝探しに行きたい
目標を見つけまい、目標を見つけるのはイヤ	目標を見つけよう、目標を見つけない
フルーツのような何かを生み出すまい	フルーツのような何かを生み出そう
フルーツのような何かを生み出すのはイヤ	フルーツのような何かを生み出したい
小学校の先生になるまい	小学校の先生になろう
小学校の先生になるのはイヤ	小学校の先生になりたい
学問をするまい	学問をしよう
学問をするのはイヤ	学問をしたい
考えまい、考えるのはイヤ	考えよう、考えたい
本を読むまい、本を読むのはイヤ	本を読もう、本を読みたい
詩を書くまい、詩を書くのはイヤ	詩を書こう、詩を書きたい
写真を撮るまい、写真を撮るのはイヤ	写真を撮ろう、写真を撮りたい
食べまい、食べるのはイヤ	食べよう、食べたい
眠るまい、眠るのはイヤ	眠ろう、眠りたい
(～するまい、～するはイヤ)	(～しよう、～したい)

...

つまり、これらは、結局——

“自分自身の”『ミライ』の行動や思考について、よい悪い、好き
 キライ…を判断しているってことなのだろう。

『Against』

ほんや い わる
本屋^{ほんや}に行^いってみては悪いよ
本屋^{ほんや}に行^いってはイヤだよ

こう^い生きては悪いよ
こう^い生きてはイヤだよ

こう^い生きればきつとまずいことになるよ
こう^い生きるとつらいよ、悲しいよ

がんば
頑張^{がんば}ってはダメ
頑張^{がんば}るのはイヤ

ベストを^く尽くしてはダメだよ
ベストを^く尽くしてはイヤ

行^いってダメ、ランプベリー！

どう^い生きればまずい？
どう^い生きれば^{どま}困る？

(～しては悪いよ
～してはまずい…)

(～してダメ、～するな
～を^{きん}禁ずるよ、～を^{よくし}抑止するよ…)

(～してはイヤ
～したら^{くる}苦しい、つらい、^{こま}困る…)

ほんや い
本屋^{ほんや}に行^いってみるといいよ
本屋^{ほんや}に行^いってほしい

こう^い生きるといいよ
こう^い生きてほしい

こう^い生きればきつとうまくいくよ
こう^い生きるとうれしいよ、楽しいよ

がんば
頑張^{がんば}りなさいよ
頑張^{がんば}ってほしい

ベストを^く尽くしてみなさい
ベストを^く尽くしてほしい

行^いけ、ランプベリー！

どう^い生きればいい？
どう^い生きればありがたい？

(～するといいよ
～すれば^{この}好ましい…)

(～なさい、～しろ
～お願^{ねが}いするよ、～を^{すす}勧めるよ…)

(～してほしい
～したらうれしい、ありがたい…)

...

つまり、これらは、^{けっきょく}結局——

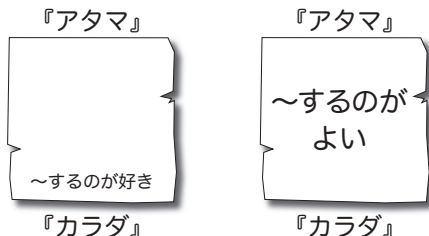
“自分^{じぶん}以外の誰^いかの”『ミライ』の行^{こう}動^{どう}や思^し考^{こう}について、よい悪い^{わる}、
好^すきキライ…を^{はん}断^{だん}しているってことなのだろう。

119

かんが
考^{かんが}えは、さら^{すす}に進^{すす}んだ。

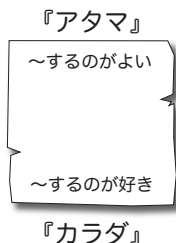
『For』

～するの^すが好きは、結局^{けっきょく}、『カラダ』の方向^{ほうこう}の感情^{かんじょう}で決^きまることが
 多い^{おお}だろうし—— 一方^{いっぽう}、～するの^すがよいは、部分的^{ぶぶんてき}に『カラダ』
 の方向^{ほうこう}の感情^{かんじょう}で決^きまっても、『アタマ』の方向^{ほうこう}の想像^{そうぞう}や思考^{しこう}、
 リクツ^{ろんり}、論理^{りそう}、理想^{よそう}、予想^{みこ}、見込み^{みとお}、見通し^{しょうらい}、将来^{かか}… も関わ^かって
 決^きめることが多^{おお}いだろう。

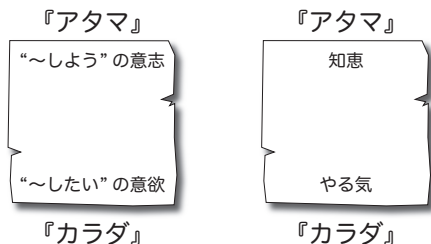


つまり——

～するの^すが好きが『カラダ』の方向^{ほうこう}にあるとすれば、
 ～するの^すがよいは、相対的^{そうたいてき}に『アタマ』の方向にあるだろう。



それは、“～したい”の意欲^{いよく}と“～しよう”の意志^{いし}、あるいは、
 やる気^きと知恵^{ちえ}も同様^{どうよう}だろう。



120

ゆきど きせつ ころ 雪解けの季節の頃、コンパリーチェとの別れを迎えた。

音楽イン ♪春 Spring

コンパリーチェの任期も3年であり、“次の年が最後の担当になる”とのことであった。

僕の方はといえば、その後も、本が与えてくれる知恵に助けられつつ、彼女の応援に励まされつつ… 目標実現のために、精一杯、努力する日々を重ねていた。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

そうして、高校3年に進級して迎えた初夏、スランプ——。

音楽イン ♪冬 Winter

勉強が全く手につかなくなってしまった。

“勉強の方がよい”と頭でわかっている——

彼女の応援が励みになっても——

本に書かれた知恵が役立っている——

…

このとき、どうしても“やる気”が湧かず、逆に、イヤイヤ感が湧き続け——。

今度は、“やる気や意欲も大切だよ。知恵や意志だけでは、足りないよ”ってこと？

——うん。それはわかる。

それはわかるけれど—— . . .

その“勉強のことを思い出すだけでも湧き上がるイヤイヤ感の程

度”は半端はんぱでなくて—— おじいさんと再会さいかいしたのは、そんなタイミングだった。

音楽 ♪冬 Winter 121 に続く

121

「アッハッハッ！ そうかそうか」とおじいさん。

「だから、笑いごとじゃないって」と僕ぼく。

「うむ。——今いまのおまえさんには、少なくとも2つの方向ほうこうの選択せんたく肢しがある」

「2つの方向ほうこうの選択肢せんたくし——」

「1つは、このまま頑張り続ける方向ほうこう。もう1つは、いったん休やすむ方向ほうこうじゃ」

「え？」

「1つは、まっすぐ帰宅きたくして、すぐ勉強べんきょうを再開さいかいする方向ほうこう。

もう1つは、ここで横よこになって、青空あおぞらや雲くもを眺めながらゆっくりくつろいでリラックスする方向ほうこうじゃ」

「——」・・・

「若者わかものよ—— 人生じんせい、休みやすみも大切たいせつじゃよ」

「でも、“今いまできることは今のうちにやった方がいい”って言うし——」

「その通りじゃ。たとえ多少たしょうつか疲れていても、もし今いまできる場合なら、今いまのうちにやる方がぎっとよい結果けつこにたどり着つきやすいじゃろう。

——しかし、もし^{いま}今できない場合、^{ば あい}例えば、^{たと}今のおまえさんのよ
うな^{じょうたい}状態の場合は、^{いま}今やらない方がよいとは思わないじゃろうか？」

「——」・・・

「もし、このまま^{やす}休まずに^{むり}無理して^{ぜんしん}前進し^{つづ}続けたら、^{おも}どうなると思
う？」

「——いいんじゃない？ ^{もくりょう}それだけ目標に^{ちか}近づけるから」

「たしかに、^{すこ}少しは^{ちか}近づけるじゃろう。

じゃが、その“^{すこ}少しの^{ぜんしん}前進”と^{ひ ひ}引き換えに、^{あたま からだ}いずれ、頭や体、そ
して、^{こころ こわ}心も^{こわ}壊れてしまいうるんじやよ。

——その“^{すこ}少しの^{ぜんしん}前進”は、^{ばくだい ていたい}莫大な停滞をもたらしうる」

「——ん？」

「^{きょくたん}極端な場合、^おそのまま^{いのち}命を^お落としてしまうことになるかもしれん」

「——んん？」

「それは、どんなに^す好きなこと、やりがいのあることをやっていて
も^{おな}同じじゃ。^{やす}休まずに^{つづ}続けておれば、^{こわ}いずれ壊れる。そんなふう
にできておる」

「——」

「それは、どんなに^{すぐ}優れたスポーツ選手であらうと、どんなに^{ゆうしゅう}優秀
な^{がくしや}学者であらうと同じじゃ」

「——」

「^{しょうらい}将来、^{なが}長く^{つづ}続けるために—— ^{いま やす}今、休むんじや」

「——」

「^い生きるために、^{やす}休むんじや」

「——」・・・

122

「^{あたま からだ こころ}頭や体、心は、もし、どこかに^{かじょう}過剰なストレスが^{くわ}加わり^{つづ}続ければ、
^{こわ}壊れてしまう前に“もう無理だよ”と^{むり}シグナルを^{はっ}発して^し知らせてく
 れる。ある意味、実によくできておる——」

「——」

「まあ、人生^{じんせい}経験を^つ積んだわしらのような場合は、そのシグナルが
^{はっ}発せられるずっと前に、^{まえ}早め^{はや}早め^{はや}に^{よゆう}余裕を持って^も休む。じゃから、
 ほとんど^{つか}疲れ^し知らずじゃ。アッハッハッ！」

「——」・・・

「^{きょくたん}極端な話、“何もかもがイヤになるほどつらい^{かん}感じ”が生^{しょう}じてしまっ
 た場合にも、少なくとも2つの^{ほうこう}方向の^{せんたくし}選択肢があるじゃろう。

1つは、“シンデしまった方がラクだろう。シンデしまいたい。
 どうやってシノウか？”という^{ほうこう}方向。

もう1つは、“生き続けるために、^{いちじてき}一時的に休んだ方が^{やす}いいって
 ことだ。^{やす}休みたい。どうやって^{やす}休もうか？”という^{ほうこう}方向。

^{ぜんしや}前者しかありえないと思^{おも}い込^こんでいるなら、それは、つまらなす
 ぎる^{ひげき}悲劇じゃ」

「——」

「おまえさんは今、^{いま}いい^{たいけん}体験をしておるんじゃよ。なぜなら、この
^{たいけん}体験を^{つう}通じて、そういった“人生^{じんせい}の^{きき}危機との^{つきあひ}付き合い方”という大
^{せつ}切な^{ちえ}知恵を^み身につけられるのじゃからのお」

「——」・・・

123

「いい機会じゃから、今ここで、そういった“人生の危機”を乗り切るための知恵を具体的に1つ教えておこう」

「はい、お願いします」

「うむ。それは、自分自身が自分のためのライフセーバーになってあげるという知恵じゃ」

「——」

「むろん、身近な人を含む誰かに助けを求めることが可能なときは、大いに助けを求めればよろしい。

しかし—— 長い人生、たとえ誰かに助けを求めたくても、何かの事情で、やむを得ずそれが不可能なときもあるかもしれん。あるいは、誰かに助けを求めることさえもイヤに思ってしまうほど深刻な状態に陥るときもあるかもしれん」

「——」

「そんなときは、自分が自分自身のためのライフセーバーになってあげるにつぎ。具体的には、まず最初に自分自身に心地よい呼吸を続けさせてあげるんじゃ」

「——心地よい呼吸？」

「そうじゃ。心地よい呼吸をしているときは、たいてい、息を吸うときにお腹が膨らみ、息を吐くときにお腹がへこむような呼吸になっておる。腹式呼吸とも呼ばれておる。まあ、イキイキ息と呼んでもよいじゃろうが、やっぱり腹式呼吸じゃ」

「腹式呼吸——」・・・内心、イキイキ息と呼びたがっている？

「そうじゃとも」 そう言うと、おじいさんは、僕のお腹の上に手

を載せて「やってみてごらん」と促した。実際に僕がやってみると、
 「——うまい、うまい、その調子、その調子」と言ってから、おじ
 いさんは手を離した。「——この腹式呼吸は、ふつう、“ぐっすり
 眠っておるときの呼吸”でもあり、“リラックス休養モードの呼吸”
 でもある。この腹式呼吸は、本来、とても心地よいものじゃ。」

例えば、おぼれて呼吸がろくにできない状況を想像すれば、好き
 なだけ、ゆったり腹式呼吸できることが、どんなにありがたくて心
 地よいかがよく実感できるじゃろうと思う」

あの“海でおぼれて苦しかったときの状況”を思い出した。

次に、心底ほっとしながら思う存分腹式呼吸できる、今の自分を
 見つめてみた。——確かに、ありがたくて心地いいや。

「うん。確かにそうだね」と僕。

「この心地よい腹式呼吸を取り戻してあげることが、自分自身のた
 めのライフセーバーにとっての何より優先すべき最初の仕事じゃ。」

——まあ、それは、海で働くライフセーバーの方々が、おぼれて
 心肺停止になってしまった方に対して、何より優先して、まず呼吸
 を取り戻してあげようとするのと、よく似ておる」

「——」

124

「自分自身のためのライフセーバーにとっての最初の仕事が、どう
 して心地よい腹式呼吸を取り戻すことなのか、わかるじゃろうか？」

「さあ——」

「それは、本来の心地よい腹式呼吸が失われるのにもなって——
例えば、“息が詰まるような、ドヨーンとした憂鬱感”が生じたり、
“何もかもがイヤになるほどつらい感じ”が生じたり、悲観的な考
えから抜け出せず心の自由が損なわれたり… するからじゃ。

じゃからこそ、まず何より最優先して、心地よい腹式呼吸を取り
戻してあげることが効果的なんじゃ。しかも、それは、脳を含めて
全身に十分な酸素を供給してあげることにもつながっている」

「——」

「この取り戻された心地よい呼吸を土台にした上で、次に、手足の
ぬくもりを感じたり、心地よくほほ笑んだり、横になって体を休め
たり、楽しみを思い出したり、好きなことをしたり… を1つ1つ
達成しながら“本来の自分”を取り戻してあげればよいんじゃ」

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

「本来の自分——」

「むろん、“本当の自分”でも、“いつもの自分”でも、“慣れ親しん
だ自分”でも、“好きな自分”でも… 自分にぴったりの呼び方に
置き換えて理解すればよろしい。この“本来の自分”を回復すること、
これこそが、心地よい呼吸を取り戻したあとに最初に目指す
ゴールじゃ。

これを達成できれば、こっちのものじゃ。例えば、どうすれば
問題を解決できるか、自分で考えてみたり、誰かに相談してみたり、
文献を調べてみたり… も含めて、次の段階に進めるじゃろう」

「——」

「もちろん、こういった人生の危機に至らないように、前もって予

ぼう はや はや よ ゆう も たいしよ
防したり早め早めに余裕を持って対処したりすることによって、
“本来の自分”を保ち続けようとするのも、よいじやろう。

たと
例えば――

にもつ みぎて も みぎて おお つか まえ ひだりて
荷物を右手に持っていたら、右手が大きく疲れる前に、左手に
もちかへて みぎて やす
持ち替えて右手を休ませる。

あたま つか かんが あたま おお つか まえ み き
頭を使って考えていたら、頭が大きく疲れる前に、見たり聴いた
りを含めて体を使って感じながら頭を休ませる。

しょうらい どりよく しんしん おお つか まえ いま
将来のために努力していたら、心身が大きく疲れる前に、“今
しゅんかん こころ あじ しんしん やす
この瞬間”の心地よさを味わいながら心身を休ませる。 …

はや はや よ ゆう も ぶぶん ぶぶん やす
これらのように、早め早めに余裕を持って部分部分を休ませて、
せつきよくてき ほんらい じぶん い じ
積極的に“本来の自分”を維持しようとするのも、よいじやろう」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 125 に続く

125

「――うん。言っていることは、よくわかるよ。

でも―― おじいちゃん、まえ
前に“ベストを尽くしてみなさい”っ
て言ってくれてたじゃん。矛盾しているよ」

「アッハッハッ！

“ベストを尽くす”ために適度な休養や余裕は不要だと思っておる
じんせい むじゅん み
人生にとっては、矛盾しているように見えるじやろう。

いっぽう、 “ベストを尽くす”ために適度な休養や余裕が必要だと思
じんせい むじゅん み
っておる人生にとっては、矛盾していないように見えるじやろう」

「——」

「わしにとって、“ベストを尽くすこと”は、休養を取ったり余裕を保ったりしつつ心身のコンディションを整えながら、すなわち、健康に気をつけながらというのが大前提じゃった。

もし休養を十分に取らずに余裕のないまま健康を害しながら取り組み続けておれば、長い目で見て“ベストを尽くすこと”から程遠くになってしまうのじゃから、それは当然じゃと思っておった。

——しかし、わしの言葉は、結果的に、説明不足で、おまえさんに誤解を与えてしまっていたようじゃのお。

わしは、おまえさんの頑張張り屋さんの性格をしっかり考慮して、言葉をもっと重ねておけばよかったのじゃろう。

難しいのお。アドバイスというのは——」

「——」 何も言葉が出なかった。

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 126 に続く

126

しばらくの間、水平線の方を眺めていたおじいさんが、ふいに、口を開いた。

「誰かがよかれと思って紡ぐ言葉—— それがそのまま、役立ったり、ためになったり、ありがたかったり… そんなときも、確かにあるじゃろう。

じゃが、一方では—— それをそのまま鵜呑みにしたり、それに

について特定の解釈しかあり得ないと思ひ込んだりすることで、害になつたり、傷ついたり、ひどい目にあつたり… そんなときも、ありうるんじゃないよ」

「——ん？」

「それは、たとえ過去に自分自身で紡いだ言葉であつたとしても同様じゃろう」

「——んん？」

「じゃから——言葉は、“誰が紡いだ言葉か”よりも、“誰にとつて、どんな意味のある言葉か”、“誰に何をもたらす言葉か”の方が、実際は、はるかに重要なんじゃないや」

「——んんん？」

「なぜじゃと思う？」

「——」・・・「——たとえば、ある状況で、ピッタリ合う言葉であつても、——別の状況では、ズレた言葉になってしまうから？」

「うむ。その通りじゃ。言葉にも“相性”がある。恋愛と同じじゃな」

「——じゃあ、どうしたらいいの？」

「はて、どうしたらいいんじゃないやろうかな？」

「——」

「——うむ。では、さっそく、次のフレーム、第6フレームを紹介しよう。きつと、その答えにたどり着くための、よいヒントの1つになるじゃろう」

「——1つ？」　そう尋ねながら地図を差し出した。

「そうじゃとも」　おじいさんは地図を受け取ると、それをゆっくり裏返した。

「では、行くぞ」

「はい、お願いします」

音楽終了 ♪心地よき日々 Comfortable Days

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For Life

ふたりのコンパス②

第5フレーム

『Against For』

【完】